

# 2017年度公開講座「0歳からのコンサート ～歌の遊園地～」

— 来場者アンケートの分析と学生参加の取り組み —

College Extension 2017

“Concert for Babies from the Age 0: Amusement Park of Songs”

: Analysis of Visitors Questionnaire and Student Participation

葛西 健治

KASAI, Kenji

キーワード：声楽、保育者養成教育、アウトリーチ、親子向けイベント、コンサート運営

## 0. はじめに

「0歳からのコンサート ～歌の遊園地～」(以下、本コンサート)は、2015年度、主催者であるこども教育宝仙大学(以下、本学)からの提案を受けて、筆者が中心となり立ち上げた、地域の親子向けアウトリーチ・コンサートである。その企画趣旨について、当時配布されたプログラムでは次のように述べられている。

「豊かな人格を育成するためには、感性を豊かにする必要があります。そのために、こどもは、乳幼児期から本物の芸術に触れることが大切だと思います。小さいお子様連れだと、遠慮してしまうことの多い、声楽のコンサートですが、今回の企画では、0歳のお子様と一緒に歌を楽しんでいただくと考えてこの講座を企画しました」(公開講座実施委員長による「ごあいさつ」欄より抜粋、引用)

本コンサートはこの趣旨に基づいて、2017年度まで3回に渡り、大学の公開講座として毎年開催されてきた。

先立つ2回(2015年度、2016年度)の取り組みについては、詳細な実施・運営の記録をもとに報告を終えている<sup>1</sup>。本稿では直近の2017年度の取り組みについて、特に来場者アンケートに関する考察と、学生参加の取り組み(学びの場としての活用)に焦点を当てて報告を行う。

## 1. 2017年度の取り組み

### 1.1. コンサートの概要

コンサートの概要は次の通りである。

- ・日程：2017年11月12日(日)
- ・時程：①開場／12時30分  
開演／13時 終演／13時45分(45分間)  
②開場／14時  
開演／14時15分 終演／15時(45分間)
- ・会場：こども教育宝仙大学421教室  
(別途、412教室を保育支援室として開放)
- ・入場料：無料
- ・定員：各回100名(延べ200名、親子合わせて)
- ・出演：La BalenVoce(ラ・バレンヴォーチェ)  
志田尾恭子(ソプラノ1)  
宮澤優子(ソプラノ2)  
葛西健治(テノール ※筆者)  
大園麻衣子(ピアノ)  
3年葛西ゼミ生(4名)

日程はこれまでの2回と同様に11月の週末に設定された。また時程、及び同一のプログラム(曲目)による45分間の公演を2回行う、という構成の大枠は2016年度を踏襲した。会場、入場料、定員についても、保育支援室を401教室から412教室に変更したことを除けば、2016年度と同様である。

出演のLa BalenVoce(ラ・バレンヴォーチェ)は4名の声楽家と1名のピアニストからなる声楽アンサンブル・グループであるが、2017年度はバリトンが都合により出演を見合わせたため、彼を除く4名で演奏を行った。

### 1.2. 学生参加の取り組み：学びの場としての活用

これまでの「0歳からのコンサート」における学生の関わりは、ボランティア・スタッフとして会場運営を担う他、上演中は子どもの見守りのサポートとして客席に

同席するというような間接的な参加に留まっていた。しかしながら2017年度は、筆者が担当する3年ゼミ(専門研究ゼミⅠ)の学びの場として本コンサートを活用することを企図し、その前提でゼミのカリキュラムを設計した。

本コンサートへの取り組みを具体的に始めた秋学期の授業内容について、その概要を表1に示す。なお2017年度の3年葛西ゼミ生(以下、学生)は4名(いずれも女子学生)であった。

表1 2017年度秋学期「3年葛西ゼミ(専門研究ゼミⅠ)」の授業内容(概要)

回	授業内容(概要)
1	2016年度公開講座の録画ビデオ視聴とアンケートの分析、ディスカッション
2	各学生による取り組みプランの発表とディスカッション
3	学生の演奏候補曲《にじ》のエディション比較と試演、ディスカッション 講義「子どもの歌の楽曲分析(《とけいのうた》を題材に)」
4	「季節の歌」(4曲)の楽曲分析の成果発表とディスカッション 演奏曲(発表内容)の大枠の決定
5	準備(練習)計画と全体のプログラム案の確認・決定
6	練習・マラカス製作
7	練習・マラカス製作 学生ステージ「うたってあそぼう」役割分担の確認
8	練習・マラカス製作 学生ステージ「うたってあそぼう」通し練習と振り返り
9	会場設営(装飾等) ラ・バレンヴォーチェとの合同練習会
10 11 12	コンサート本番(事前準備、G.P.(総練習)、後片付けを含む)
13	コンサートの振り返り(録画ビデオ視聴)とディスカッション
14	レポート作成
15	レポートの仕上げと提出

第1回では、2016年度の録画ビデオを全員で視聴した。その後、当時回収した来場者アンケート(延べ52枚)のコピーを配布し、録画ビデオと併せてコンサートを評価、分析し、今回の取り組みにおける課題について検討した。

2016年度は「童謡メドレー2」の場面で手遊びを取り

入れるなど、観客の参加型演出の拡充を図ったが、ディスカッションの中で、今回はそれらの演出を更に増やしたい旨学生から提案がなされた。具体的には ①手遊びは、これまでの学びを生かして学生が中心になって行うこと ②座ったままの手遊びだけでなく、立って体をほぐしながら行えるような簡単なダンス遊びを取り入れること ③手作りの楽器(マラカス)を子どもたち一人ひとりに配布して音楽に参加してもらい、終演後はそれをお土産としてプレゼントすることである。

学生が演奏する曲目については、まず各自が希望を出し、授業の中で楽譜のエディション比較や楽曲分析を行い、その後プレゼンテーションとディスカッションを重ねながら内容を集約し、決定した。学生が担当するステージのタイトルは「うたってあそぼう」とし、子どもが飽きずにコンサートを楽しめるよう、ラ・バレンヴォーチェによる歌唱ステージ(鑑賞)と交互に、2回に分けて行うこととした。

取り組みの成果については後述する。

### 1.3. 運営

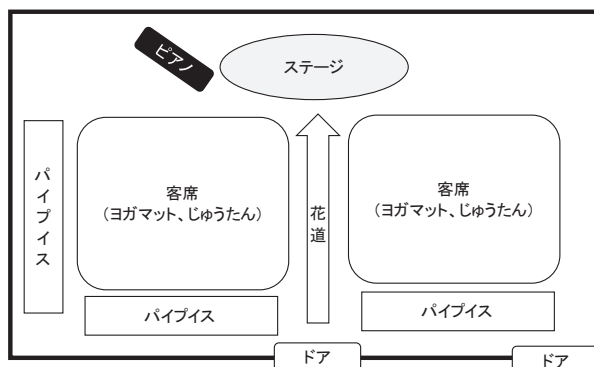
企画・運営に関する事柄の多くについては、2016年度に引き続き本学の公開講座実施委員長(専任教員)が担当し、「なかのまちめぐり博覧会2017」(主催:なかのまちめぐり博覧会実行委員会・中野区、期間:2017年10月21日~11月26日)へのエントリー(本コンサートの案内文は当該パンフレット54ページに掲載)、及びFAXとメールによる参加希望の取りまとめ(申込期間:2017年10月1日~11月8日)等を行った。

当日は9名の女子学生(2年生3名、1年生6名)が会場運営のボランティアとして参加した。

### 1.4. 会場設営

会場(421教室)のレイアウトは図1の通りである。

図1 会場のレイアウト<sup>2</sup>



配置の大枠は2016年度に準じている。2015年度の反省を受けて使用を中断したステージ後方の鏡については、

今回も使用しないこととした。

### 1.5. 当日の記録

#### 1.5.1. 会場運営（役割分担）

当日、会場運営に携わったのは専任教員1名（公開講座実施委員長）、事務職員5名、有志学生9名であった。以下にその主な役割分担と業務内容を記す。

- ・ 玄関係：駐輪場の案内、ベビーカーの整理、受付への誘導
- ・ 受付係：予約来場者のチェック（記帳）、プログラム配布、アンケート配布・回収
- ・ 会場係：上履き持込用ビニール袋の配布、必要に応じたのドア開閉、客席への案内・誘導、演奏時の入場整理（途中来場者への対応）
- ・ 保育支援室(412教室)担当：利用者(児)への案内、補助

2016年度までは会場係とドア係（客席ドアの開閉を担当）を分けて配置していたが、今回はその業務内容を会場係に統合した。また今回は学生ステージ「うたってあそぼう」の中で、子どもたちに手作りの楽器（マラカス）を配布する場面が設けられたため、その時間帯のみ、有志学生5名が会場内で配布のフォローを行うこととした。

#### 1.5.2. タイムスケジュール

全体運営に係る当日のタイムスケジュールを、出演者の動きを中心に表2に示す。

表2 タイムスケジュール（2017年11月12日）<sup>3</sup>

9:00	ピアノ調律（～10:30）
10:00	出演者楽屋入り、会場確認
10:30	G. P. 開始
11:30	G. P. 終了 → 昼食、メイク、着替え等
13:00	公演① 開演
13:45	公演① 終演 → 来場者見送り等 （観客の入れ替え）
14:15	公演② 開演
15:00	公演② 終演 → 来場者見送り、着替え等
15:45	撤収完了

同一のプログラム（曲目）による2回公演（各公演45分間）という試みは、2016年度に初めて行ったものであるが、全体運営に係る諸々のタイムスケジュールを含めて滞りなく終えることができたため、今回も全く同様のタイムスケジュールを採用した。

### 1.5.3. プログラム（曲目構成）と実演の記録

プログラム（曲目構成）は表3の通りである。

表3 プログラム（曲目構成）（2017年11月12日）

歌のメリーゴーラウンド	(Sop.1, Sop.2, Ten.)
「秋のうた」	
まっかな秋	(Sop.1)
紅葉	(Sop.2)
どんぐりころころ	(Ten.)
北風小僧の寒太郎	(Ten.)
あわてんぼうのサンタクロース	(Sop.1, Sop.2, Ten.)
「うたってあそぼう①」 (学生)	
むすんでひらいて	
あたまかたひざボン	
にじ	
「ラ・バレンヴォーチェによるステージ」	
オ・ソーレ・ミーオ（私の太陽）	(Sop.2)
フニクリ・フニクラ	(Ten.)
ヴィリアの歌	(Sop.1)
（喜歌劇《メリー・ウィドウ》より）	
美女と野獣	(Sop.2)
ホール・ニュー・ワールド	(Sop.1, Ten.)
「うたってあそぼう②」 (学生)	
ミッキーマウス・マーチ	
※手作り楽器（マラカス）配布	
ホ！ホ！ホ！	
おもちゃのチャチャチャ	
さんぽ	(全員)

- ・ 各行の内容は「曲名（歌唱担当者）」の通りである。
- ・ 歌唱担当者はパート名の略記で記載した。

全体の構成はラ・バレンヴォーチェと学生によるステージが交互に展開される形となっている。これは、子どもの集中力を考慮した「飽きさせない工夫」として、学生の中から出たアイデアである。「うたってあそぼう」①②は、いずれも手遊びや楽器遊びなど、子どもたち（親子）の参加を盛り込んだプログラムになっており、言わば（原則として着席での）純粋な音楽鑑賞となるラ・バレンヴォーチェのステージと対照をなし、全体の流れにメリハリを与えている。

ラ・バレンヴォーチェによる「秋のうた」は日本語で歌唱したが、後半の曲目のうち《オ・ソーレ・ミーオ（私の太陽）》は全て原語（イタリア（ナポリ）語）で、《フ

ニクリ・フニクラ》は日本語訳詞と原語（イタリア（ナポリ）語）を織り交ぜて歌唱した。この2曲はカンツォーネ（イタリア民謡）の中でも比較的ポピュラーな作品であり、音楽も平明なことから、あえてその本質を味わってもらおうべく原語での歌唱を選択した。なお《ヴィリアの歌》《美女と野獣》《ホール・ニュー・ワールド》はいずれも日本語訳詞で歌唱した。

幕開けの《歌のメリーゴーラウンド》、終曲の《さんぼ》という大きな枠組みは、2015年度、2016年度のプログラムを引き継いだものである。特に今回の《さんぼ》の場面では、出演者が客席にいる子どもたちの手を取り、一緒に歌いながら行進するという演出を試みた。このような演出は、舞台と客席が分離され、また場合によっては階段などの段差の多い一般的なコンサートホールでは実現が容易でない。これは体育館という、フラットかつ小規模な会場でこそ効果的に実現し得た演出であり、このコンサートの特長ともなり得るものだろう。

## 2. 来場数の実績

予約の受付状況（予約数）と当日の来場数を表4に示す。なお本項における来場数は、事前に作成した予約者名簿に基づき、当日受付において集計したものである。

2015年度、2016年度の実績<sup>4</sup>を考慮し、今回は総計で定員（200名）の4割増しとなる280名の予約を受け付けた。表4に示した通り、実際の総来場数は217名にとどまり、予約者の来場率は76.4%という結果であった。それぞれの回の実績を見ても、予約者の来場率はいずれも8割を下回っており、各回について定員を4割程度上回る予約を受け付けたことは、本コンサートの運営上妥当であったと言える。

この結果は、入場料が無料であること、0歳から入場可能な親子向けイベントであること等、本コンサートの特徴に関連付けて捉える必要がある。換言すれば、本コンサートと同じような特徴を持った親子向けイベントを企画する際には、この予約数の割合が参考になるものと

表4 予約数と来場数

	① (13:00)				② (14:45)				計			
	組	大人	子ども	計	組	大人	子ども	計	組	大人	子ども	計
予約数	43	80	63	143	42	79	58	137	85	159	121	280
来場数	35	68	45	113	31	58	43	101	66	126	88	214
来場率 (%)	81.4	85.0	71.4	79.0	73.8	73.4	74.1	73.7	77.6	79.3	72.7	76.4
予約なしの当日来場数	2	2	0	2	1	1	0	1	3	3	0	3
総来場数	37	70	45	115	32	59	43	102	69	129	88	217

思われる。

## 3. アンケートの結果と考察

来場者には任意・無記名によるアンケートを行った。アンケート用紙を図2に、アンケートの回収状況を表5に示す。

図2 アンケート用紙 (A4版・縦1枚)

2017年11月12日 (日)

**区民公開講座 0歳からのコンサート「歌の遊園地」**  
**アンケート**

- あなたの性別と年齢をお答え下さい。  
男 女  
10代 20代 30代 40代 50代 60代以上
- お父さまの年齢と性別、人数をお答えください。(※お子さまとご一緒のお客様のみ)  
 \_\_\_\_\_歳 ( 男 女 ) \_\_\_\_\_歳 ( 男 女 ) \_\_\_\_\_歳 ( 男 女 )  
 計 \_\_\_\_\_名
- お住まいの地域はどちらですか。  
中野区 その他 ( \_\_\_\_\_ )
- 本日のイベントについて、どちらでお知りになりましたか。  
「なかのまちめぐり博覧会」関係 (HP、パンフレットなど)  
ないです (中野区情報誌) 本学HP ポスター・チラシ  
知人 出演者 その他 ( \_\_\_\_\_ )
- 本学の区民公開講座「0歳からのコンサート」へのご来場は何回目ですか。  
はじめて 2回目 3回目
- ご感想をお聞かせください。  
とても良い 良い ふつう あまり良くない 良くない
- ご意見、ご感想、今後のリクエスト(曲)などございましたら、自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

こども教育宝仙大学

表5 アンケートの回収状況

	配布枚数	回収枚数	回収率 (%)
① 13:00 の回	37	36	97.3
② 14:15 の回	32	32	100.0
総計	69	68	98.6



アンケート用紙はプログラムと併せて、来場の各組（親子）に1枚ずつ配布した。69枚配布し、68枚の回収を得た。有効回収率は98.6%である。

以下、アンケートの各項目別にコンサート全体（1回目と2回目をまとめたもの）の集計結果を整理し、考察する。

### 項目1 回答者の性別と年齢

表6 回答者の性別と年齢一覧 (名)

	男	女	無回答	計
20代	0	2	0	2
30代	9	30	4	43
40代	4	15	2	21
無回答	1	0	1	2
合計(人)	14	47	7	68

世代別に見ると30代が最も多く(43)、次いで40代(21)、20代(2)の順となる。これらは全て子育て中の親の世代である。また今回は、祖父母世代(50代以上)の来場者がほとんどいなかった。性別では、無回答を除く男女比が約1:3(13名:47名)であり、多くの組では母親が回答していた。

### 項目2 帯同児の内訳

表7 帯同児の内訳一覧 (名)

	男	女	計	年齢層小計 (比率%)
0歳	5	7	12	42 (50.6)
1歳	4	9	13	
2歳	9	8	17	
3歳	3	4	7	33 (39.8)
4歳	11	10	21	
5歳	1	4	5	
6～10歳	3	5	8	8 (9.6)
合計	36	47	83	83 (100.0)

帯同児の合計は83と、前項で示した総来場数(88)より5名少ないが、これは本項の集計が受付でのカウントではなく、アンケートの回答をベースとしているためである。

年齢別に見ると総計、男女共に4歳児(年少～年中)の帯同が最も多かった。また今回の帯同児の最高年齢は10歳(男児、小学3～4年)であった。

帯同児の年齢層を ①幼稚園入園前(0～2歳) ②幼稚園入園後(3～5歳) ③小学校入学後(6～10歳)

の3つに分けて小計と比率を算出したものが、表7右端の値である。最も低い年齢層である①が42(50.6%)となり、この層が帯同児全体の半数余りを占めていた。②と併せれば75(90.4%)となり、帯同児のほとんどがいわゆる「未就学児」であった。

### 項目3・4 居住地域・広報媒体

項目3と4については併せて記述する。

(居住地域)(組)

中野区 49

その他 19(北区1、新宿区4、杉並区4、豊島区2、練馬区1、文京区1、立川市1、神奈川県2、千葉県1、無回答2)

表8 本コンサートの情報を得た広報媒体一覧

	計
まちめぐり関係	45
ないせず <sup>5</sup>	3
本学HP	0
ポスター・チラシ	2
知人	12
出演者	6
その他	0
合計	68

本学は中野区に位置し、本コンサートは「区民公開講座」として開催されているため、やはり同区内の在住者(49)が来場者のほとんどを占めていた。また前述の通り、本コンサートは中野区の地域イベントを網羅した「なかのまちめぐり博覧会2017」にエントリーしていたが、そのパンフレットやホームページが今回最も集客に寄与していた。「まちめぐり関係」と「ないせず」の回答数を合わせると48になるが、これはほぼ、中野区在住の来場者の組数(49)に一致している。

本学独自の広報媒体である「本学HP」は0、また本学で作成した「ポスター・チラシ」は2という結果だった。

### 項目5 来場回数(リピーター率)

表9 来場回数一覧 (組)

	計	比率(%)
初めて	53	77.9
2回目	13	22.1
3回目	2	
合計	68	100.0

来場回数は「初めて」が53 (77.9%) と、全体の約8割を占めた。2回目以上のリピーターは合わせて15 (22.1%) となり、2割強の来場者が前回、前々回 (初開催だった2015年度の本コンサート) に続いて予約申し込みを行い、実際に足を運んでくれた。

## 項目6 評価

表10 評価一覧 (組)

	計
とても良い	60
良い	7
ふつう	1
あまり良くない	0
良くない	0
合計	68

評価は高く、ネガティブな回答 (あまり良くない、良くない) は0だった。これが評価を尋ねる唯一の項目だったことを考えると、単に入場料が無料だったという理由だけでなく、来場者は曲目選択や構成、演奏の質、学生の取り組みなどを含め、コンサート全体を総合して高く評価したと言える。

## 項目7 自由記述

自由記述は、全アンケート68枚中57枚で回答を得た。リピーターは、ほぼ全て (15枚中14枚) において自由記述まで丁寧に回答した。

以下、5つの観点から回答の内容を整理し、適宜引用しつつ考察を行う。なお引用に当たっては回答者の記述内容をそのまま表記する。

### 「うたってあそぼう」(学生ステージ) への評価

今回は学生によるステージ「うたってあそぼう」の中で、延べ5曲の手あそびを取り上げた。「親しみやすい手遊びはノリノリでやっていました (30代女性/4歳男の子・2歳男の子)」 「4歳の娘はお姉さん方の手遊びに大コーンでした (30代女性/4歳女の子・0歳女の子)」 「手遊びがあり、子どもは楽しめたようでした。子どもがあきることなく、楽しい時間が過ごせました (30代女性/5歳女の子・1歳女の子)」 等、学生による手あそびは好評だったようである。また今回、学生のアイデアで初めて行った手作りマラカスの配布については、「学生さん達のコーナーも、手遊び、とくにマラカスもらってから、子供もテンション上がりまくりで楽しんでました (30代女性/2歳女の子)」 「子供が参加できる、手あそび歌、マラカスなどがあると楽しそうにしていました (30代女性/2歳女の子)」 「ゼミ生の方作の

マラカス、子ども超お気に入りです (30代女性/0歳女の子)」 等、特に低い年齢層の子どもを帯同した来場者から高い評価を得た。「学生さんの練習の場になったのはよかった (30代女性/3歳女の子)」 など、学生の取り組みにおける教育的な意義について好意的に理解を示す回答もあった。

### 参加型演出(《さんぼ》の行進への子どもの参加)への評価

前述の通り、今回は最後の《さんぼ》の場面で、会場の子どもたちの手を取って一緒に歌いながら行進するという演出を試みたが、「さんぼの行進が楽しそうだった (30代女性/4歳男の子)」 「今回は一緒に行進もあり、参加できる形が良かったです (30代女性/2歳男の子)」 等、特に男の子を帯同した来場者から、この演出に対する好意的な声が寄せられた。

### 鑑賞する子どもの姿への気付き

それぞれの子どもの年齢によって鑑賞する姿も様々だったようである。全体として多く挙げられたのは「0才の子ども、さいごまで楽しめました (40代女性/0歳女の子)」 「いつも人の多いところへ行くと必ず泣く娘がずーっとごきげんでした! (30代女性/0歳女の子)」 「0才の息子もおとなしく聞いていました (30代女性/4歳女の子・0歳男の子)」 「1さいの子もしずかにきいていました (30代女性/8歳男の子・1歳男の子)」 「歌手の方の迫力ある歌声にこどももじっとききいていました (40代女性/1歳男の子)」 等、特に年齢の低い子どもでも飽きることなくコンサートを楽しんでいる姿への気付きであった。少し子どもの年齢が上がると「3才の子どもも真剣な表情で聴いていました (30代女性/3歳女の子)」 「子供が声量に驚いて楽しそうでした (40代男性/4歳男の子)」 等、より能動的に音楽を楽しむ子どもの姿への気付きが記されていた。

また受容的な鑑賞態度だけでなく、例えば「0歳の娘もとても反応しており、来てよかったです! (30代女性/4歳女の子・0歳女の子)」 「子供も喜んで体を動かしてました (30代男性/1歳女の子)」 等、自らの体で音楽に反応を示す姿や、もっと具体的に「子供も一緒に歌ってました (40代女性/2歳女の子)」 「保育園で歌っている歌があったので子供はうれしそうでした (40代女性/4歳女の子)」 「6才の子供も知ってる曲ばかりで、少しはさかしく小さい声で歌ってました (40代女性/6歳男の子)」 等、知っている曲を子どもがそれぞれに味わい、楽しみながら一緒に歌う姿を、親が喜びを持って受け止めている様子が見て取れる。

### 音楽の楽しさを親子で共有できる場としての意義

本コンサートは親子を対象としたアウトリーチ活動として、親(大人)と子どもが共に楽しめることを念頭に、運営や曲目選択の工夫を凝らしてきたが、「とてもステキな時間を娘と過ごせました(30代女性/0歳女の子)」「親子でとても楽しかった(30代性別不明/1歳女の子)」「親子で楽しめました(30代女性/2歳女の子)」「子供と一緒に気軽に来られてとてもよかったです(30代女性/4歳女の子・1歳女の子)」「子どもも大人も楽しめる内容で大満足でした(30代女性/6歳女の子・4歳女の子)」等、そのコンセプトへの共感と評価が汲み取れる回答がいくつか寄せられた。中には「子供より私がとても楽しませてもらいました(30代女性/2歳男の子)」というように、大人の満足感を前面に記した回答もあった。

### 要望と課題

1件ではあるが「お昼寝の時間と重なるので、午前中を希望します(40代女性/1歳男の子)」との要望があったが、表1のタイムスケジュールの通り、ピアノの調律やG.P.(総練習)を当日の午前中に行う必要等を考慮すると、現時点では午前中の開催に変更することは難しい。

「もう少し曲のテンポがゆっくりだと歌える曲もあるかなと感じました(30代男性/1歳女の子)」との声は、子どもと一緒に歌う場面や曲目を考える上で、今後参考にしたい。

「クラシック、オペラももっと色々聞いてみたい(30代女性/0歳女の子)」という声があった一方、「もっと、子供と遊ぶプログラムがあるとうれしい(30代女性/4歳男の子)」との声もあり、曲目の選択においてそのバランスを図ることは、今後も大いに検討の必要がある。

また現行の出演者の編成では応えにくい要望ではあるが、「もっと楽器が増えると嬉しい(40代女性/0歳女の子)」「いろいろな楽器のコンサートも見てみたい(40代性別不明/4歳女の子・1歳女の子)」との声も寄せられた。これは、学生によるマラカスの取り組みが好評だったことの一つの表れとしても解釈できる。

## 4. 学生参加による学びの成果： レポート課題の記述から

コンサート直後の第13回の授業では、学生と共に録画ビデオを視聴し、学生ステージを中心に振り返りを行った。その後、来場者アンケートの内容について共有し、ディスカッションを行った。これらの振り返りを含めた本コンサートへの取り組み全体を文章化し、レポートにまとめて提出することを、ゼミの学期末の課題とした。

本項では提出されたレポートの中から、学生の学びの成果に関する記述を引用し、授業実践としての本コンサートの教育的意義について検討する。引用に当たっては記述内容をそのまま表記する。

事前学習の一環として、第4回の授業では、学生が任意に選曲した子どもの歌を分析し、発表とディスカッションを行うことを課題とした。その取り組みに関連して「私は「まっかな秋」を分析し、言葉での発音(※筆者注：イントネーションの意と思われる)と音程が同じ等、今まで気づけなかった曲の魅力を沢山感じることができた」という記述があったが、これは既知の子どもの歌について、学生が自分なりの分析を通して新しい知見を得たことを示している。

第9回の合同練習会から本番にかけて、プロの音楽家であるラ・バレンヴォーチェとの協働的な関わりがあったが、このことについては「先生方の練習を見ていると、本番のように迫力を感じ歌に引き込まれた。本番では私達も堂々と歌の魅力が伝わるように歌うことが大切だと感じた」「練習の時から常に一生懸命取り組むことが大切」というように、表現に対する真摯な姿勢や、事前準備の重要性についての学びがあったことがうかがえる。

録画ビデオの視聴による学生ステージの振り返り(第13回)では、「もっと体を動かしながら歌うとよかった。自分では動いているつもりであったが、ビデオで見るとあまりわからず、楽しそうに見えないことがわかった」「手遊びや手拍子を精一杯やっていたのだがDVDで観ると動きが小さく、楽しそうに見えないこともあった」「大きさなくらい動きを大きくし、司会も一方的ばかりでなく掛け合いを増やす等の工夫もより必要だった」など、特に身体的な表現における自己認識のずれへの省察が述べられている。

前述のプロの音楽家との協働にも関連するものと思われるが、「歌を歌うときの声の出し方をもっと学んでみたい」「聞いている人に気持ちが伝わる様な歌声になりたい」というように、学習意欲の向上をうかがわせる記述も見られた。

## 5. おわりに

本学における公開講座「0歳からのコンサート」も3回目(公演の実数で言えば延べ5回)を終え、このような親子向けのアウトリーチ・コンサートにおける運営上、曲目構成上のノウハウが徐々に蓄積されてきたように思われる。また今回は初めて、授業の一環として学生の参加を試みたが、来場者アンケートでは彼女らの取り組みに対して温かい評価の声が寄せられた。本番のみならず、そこに向かう事前の準備から、事後の振り返りを

含めた授業実践の中で彼女らが様々な学びや気づきを得たことは、担当教員たる筆者としては嬉しく思っている。

地域に開かれたコンサートとしてその内容の充実を図っていくことはもちろんであるが、今後は保育者を目指す学生の学びの場としての活用を更に広げ、その教育的意義を探究していきたい。

#### 注

- 1) 葛西健治 (2018b)、「公開講座「0歳からのコンサート～歌の遊園地～」—2年間の取り組み—」、『こども教育宝仙大学紀要』9(2)、95-102。
- 2) 前掲96頁、図1を修正し引用。
- 3) 前掲99頁より引用。
- 4) 来場率は、2015年度が64.3% (予約数126名、来場数81名)、2016年度が74.5% (予約数200名、来場数149名) だった (前掲98頁、101頁)。
- 5) 中野区の学習・文化芸術・スポーツ活動などの生涯学習事業を中心に、区立施設や区内公的機関が主催する生涯学習情報を紹介する情報紙。毎月最終日曜日に、タブロイド版のカラー4ページで11万部を発行し、新聞折込(朝日・産経・東京・日本経済・毎日・読売)で区内新聞購読世帯へ配布されているほか、区役所や体育館、図書館等、区内の公共施設に設置された広報スタンドでの配布も行われている (<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/dept/403200/d013281.html> 2018年11月10日閲覧)。